

しかし、この頃になると既に戦局は決定的に悪化し、六月には米軍機が北九州を初空襲し、七月にはサイパン島が米軍の手に落ちて、敵機による大規模な東京空襲も時間の問題となつた。このため、「もはや東京での綴織制作はどうてい不可能であるから、どこか適当な地に疎開するよう」にという柳原義光の強い勧めに従つて、虚籠はその年の九月、東京から郷里鶴岡への疎開を決心したのである。

彼等はあわただしく所定の出発日までに荷物をまとめねばならなかつたが、出発当日は、あいにくの暴風雨であつた。この時、土砂降りの雨の中を夜通し日黒三谷から恵比寿の貨物駅までの約一里を数十貫の家財道具を荷車に積んでの往復に体力も気力も消耗し尽した虚籠は、駅前の坂道でついに荷車もろとも丈余の崖下に真っ逆さまに転落するところ、危うく路傍の人に助けられて九死に一生を得たのであつた。

疲れなばふる里の湯に来よといふ

姉子もありき曼荼羅の旅

かつて文展出品制作の疲れを癒すべく故郷に旅した時には、こうした歌も浮んだほどに純朴な人情にひたことのできた虚籠ではあつたが、戦争末期の混乱と窮乏の中では、既にそうした感傷の余裕は故里にもなくなつていた。

「その郷里に疎開第一日の印象として、私は全く思いもよらぬ大衝撃を感じたのである。それは私の曼荼羅謹作念願達成の、そして生命をかけての疎開行を、わが郷里の親戚の一人はこれを阻止し、

他へ追放すべく画策し極力運動していたことを聴いた時であつた。その時私は余りのことにつだ呆然自失してしまつた。

「その年の冬は数十年来の大雪だつた。燃料を入手できなかつた私は、東京から大切に持つて来た広巾織用織機二台を燃やしたのである。ちょうど今日のような寒い日、雪の上に薦を敷いて、東京中渋谷道玄坂の夜店で二円五十銭で買い求めたゼンマイ造りのこぎりでゴツゴツと堅い松材の機台を断ち切りながら（機台よゆるしてくれ、お前は私のためには生命の親でもあつた、お前があの大戦時中を文展出品の聖観世音菩薩や不動明王の尊像を謹作させてくれたので私もどうにか作家として生きのびて来られたのだが、しかし今疎開先きのこの寒い冬の日を、火の気なしには生きられないのだ……）草木国土悉皆成仏、南無阿弥陀仏と念佛を唱えながら、まことに大恩人を葬送するときのよう敬虔な気持でその機台を断ち切り、そして燃やしたのであつた。」

（『冬の夜の想い出』）

一方、困つた虚籟達を何の気取りもなく温かく助けてくれた人々もまた少なくなかつた。その冬最後の機台まで燃やしたのでは綴織作家としてやつて行くことができず、思い余つて猛吹雪の中をとある旧家に杉の枝を貰いに行つた時、その家の老人が初対面にもかかわらず、快く雪舟一ぱいの枝をのせてくれた思い出を、虚籟は有難くて思わず「活菩薩様——と手を合せた」と書き残している。

こうして鶴岡に疎開した虚籟達は、元曲師町の鈴木医院に間借りして疎開生活を始めたが、彼らが東京を去ると間もなく頭山が死に、彼の門下生も離散して、米軍機による本格的な東京爆撃が始まつた。翌昭和二〇（一九四五）年になると東京以外の全国の主要都市も次々に空襲されて灰燼に

帰して行つたが、中でも三月一〇日の東京大空襲は、一夜にして一〇万人の死者が出る悲惨なものであつた。

この日、虚籟の知人も被爆して家が全焼したが奇蹟的に家族は無事であった。そのとき焼跡の中から唯一つ毀れずに発見されたのが、虚籟の謹作した觀音の塑面であった。この塑面はその後虚籟のもとに届けられたが、この戦火に焼かれた人々の苦しみを代つて引き受けたかにみえる顔半面が痛々しく焼け爛れた尊像に、虚籟は終生香華こうげを欠かさなかつたという。

この年の五月、虚籟の長男哲雄が南方で戦死した。しかし既に内地も戦場と化して混乱の極に達しつつあつた折から、虚籟はその死を知る由もなかつた。

そして八月、広島と長崎に原爆が投下されて、わが国はついに無条件降伏して戦いが終つたのである。

敗戦と『如意輪觀世音菩薩』の謹作

一般国民を含む二五〇万の死者、焼土と化した都市と量り知れない遺族の悲しみを遺して戦争は終つたが、国民生活の窮乏はむしろ戦後の方が一層深刻であつた。インフレが進み、闇市が栄え、虚籟と秋野も自活するために鍼を握り、食料を求めて買い出しに行かねばならなかつたが、この生活はわけても秋野にとつて苛酷な体験であつた。

一方、敗戦と共に始まつた占領軍の指令による日本の非軍国主義化を目的とした旧体制の解体と、武力を放棄して平和的民主的な国家として再生することを目指した政治改革が次々に打ち出された

のもこの時期であった。当時の私の体験によれば、この間の政治的・社会的状況の変化はまさに豹変とも言うべき激しさであつて、この改革を推進した占領軍当局者や革新的な政治家、知識人の多くは、改革の必要性を強調するために戦前戦中の日本の国家主義と軍国主義の過ちをもつぱら日本の近代化の不十分さに、換言すれば日本社会の前近代性、封建性に求める立場をとつたのであつた。こうした立場は、西洋中心の近代化や歴史の見方に由来するものであるが、この論法は国民に反省と改革を促すだけでなく、同時に日本の文化や伝統に対する劣等感、自信の喪失を強いるものであったことも否めない。

虚籠もまた、日本の敗戦とそれに続く政治改革を最も深刻かつ誠実に受けとめようとした一人であつた。彼は既述のように歴史の意味を宇宙人的自覚に向う人類の進化と考える立場から、人類の政治的進化を人間がまだ素朴な存在の信頼に生きていた原初的な神中心の「神權的」な時代、人間が個我の自覚をもつことによつて個人的集団的に対立し、一部特權的な者による独裁や寡頭政治が行われる「特權的」な時代、人間が世界的人類的宇宙的な自覚をもつことによつて万民の幸福を目指した人民主権の政治が行われる「民權的」な時代に分け、民主主義をこの歴史の進運にかなつた現代以後における人間生活の基準思想であると考えていたので、戦後の改革には特段の強い政治的関心をもつていた。彼がこの頃繰り返して「平和の設計」について書き、ユネスコ運動に深く関わるようになったのも、日本の再建にはまずその敗戦のよつて来る原因を究めねばならず、日本の民主化を真に内發的なものとするためには人生と歴史についての哲学的反省と再教育が不可欠だと考えたからであつた。ただ虚籠は、当時の革新派と違つて、單に日本の歴史と民主化の遅れを糾弾す

るのではなく、われわれの中にもすぐれた平和の思想と文化遺産があるということ、日本は敗戦によつて戦争放棄の国となることにより、「大和民族本然の姿にもどつた」のだということを、今こそ国内外に向つてはつきりと表明し、実証することが生き残つた者の責任であると考えていた。そのためにも彼の曼荼羅は何としても完成されねばならなかつたのである。

敗戦後の混乱の中すでに後援者もなくなつた今、献上仏謹作の話は立ち消えになつたものと思つた虚籟は、如意輪觀音の制作を断念し、幸い彼の曼荼羅謹作の趣意を理解した当地の名族風間家の当主風間幸右衛門の厚意で、その別邸無量光苑を曼荼羅制作の工房として提供されたのを機に、いよいよ『曼荼羅中尊阿彌陀如來』の謹作にとりかかつた。

ところがその途中で、頭山門下だつた渡辺悌治が虚籟を訪ねて来て、献上仏謹作の計画は取り止めになつたのではなく、國破れた今こそ当初の志を全うしたいと言い、彼の奔走と地元の婦人会長今井栄らの努力もあつて、庄内三郡の女子青年団と婦人会、一般有志の協賛が得られることになつた。そこで虚籟はこの淨財をもとに、改めて赤字覚悟で『如意輪觀世音菩薩』の謹作に取り組むことになつたのである。

如意輪觀音は、意のままに宝を出すという如意宝珠をもち、一切の人々の願いを満たす觀音菩薩のことであり、一面六臂、一面八臂、一面十臂等々の形があるが、虚籟の謹作しようとした一面六臂の尊像は最も普通の形態であつて、その六本の手はそれぞれ無明のために六道の輪廻の苦海に沈淪している衆生救済の六種の道あるいは六波羅蜜を表す。

虚籠はこの一面六臂の観音像に、彼の宇宙人主義的世界觀に基づく政治、経済、道徳（哲学）、科学、芸術、教育と宗教が調和的に統合された世界の実現と永遠平和への希いをこめ、縁飾りには左右の中央に賢瓶の模様を入れて慈愛と相補う叡智を、上下四隅に蓮華と法輪を重ねて人間の本性と天地の大道の合一を、それを繋ぐハート型の草花模様で庄内の婦人達の真心と協力を表現しようとしたのであつた。

この如意輪観音像の制作は昭和二一（一九四六）年八月に着手され、翌昭和二二年五月の新憲法発布に合せて完成すべく必死に織り進められ、八カ月後の昭和二二年四月、縦四尺五寸横三尺六寸の尊像ができ上がつた。

この尊像は鶴岡市の磐若寺で開眼供養の後、協力者への御札をかねて庄内の諸寺院を巡回展覧されたが、ある寺ではあまりに多数の人々が集まつたため床が抜けるという椿事が起つたほどであった。そしてこの年行われた朝日新聞社と東京都共催の現代日本美術総合展に招待出品の上、庄内婦人会、女子青年団及び一般有志から皇太后陛下（貞明皇后）に献上されたのである。

当時、皇太后陛下は爆撃で焼失した御所の焼跡に作られた見るも無残な粗末なバラックにお住いであつたが、秋野が侍従の話として回想するところによると、皇太后様はこの献上仏を大変にお慶びになり、それを御自分のお部屋にお掛けになつて毎朝礼拝なされたと伝えられる。

『曼荼羅中尊阿弥陀如来』の完成

東京から鶴岡に移つた虚籠には、曼荼羅謹作の外にもう一つの夢があつた。それはこの故郷に綴

織を移植したいという秘かな願望であった。この夢は文化国家の建設と産業の復興が戦後の課題となるに及んで抑え難いものとなり、終戦の翌年の春から男女六名の受講生を集めて綴織の講習会を開いた。

しかしながら、実際に受講生に綴織を教えようにも、すでに十分な資金も余分の色糸の貯えも虚籠にはなかつたので、結局、秋野のもつっていた作品のうち最初の帝展入選作である『花籠』を売り、いま一つの文展入選作である『フランシングの居る』綴錦壁掛（縦六尺横四尺七寸）をほぐして受講生用の色糸に使つたのであつた。自分の作品を自分で解体しなければならなかつた秋野の心中は察するに余りあるが、それでも講習会は維持することができず、この企ては一年で挫折したのである。

献上仏如意輪觀音の謹作は、この綴織講習会での無償奉仕との併行であつたから、彼等の疲労と消耗は極限に近かつたはずであるが、虚籠は翌昭和二三（一九四八）年には引き続いて『曼荼羅一部・飛天奏楽』を完成している。この、天人が楽器を奏でつつ舞い降る姿を織つた作品は、曼荼羅一部を構成する一対の飛天像の一つとして制作されたものであつたが、その年の第一回現代日本美術総合展に招待出品された上、後に連合軍総司令官マックアーサー元帥が帰国の際、ときの衆議院議長松岡駒吉によつて、同元帥の寛大な占領政策に対する感謝の意をこめて、記念品としてマッカーサーに贈呈されたのであつた。

この後、虚籠は彼の曼荼羅謹作の歴程中最大の山場ともいべき『中尊阿弥陀如来』の謹作を開くことになるが、その完成には仏像本体だけで昭和二三年から二五年まで三カ年、一尺幅の絨

模様の縁飾りを入れると足かけ五年の歳月を要した大事業となつた。しかもそれは、虚籟自身の言葉によれば、「気の向いた時だけ織るといった呑気なものではなく、一日八時間ないし一〇時間、最後には一二、三時間ぶつ通して織る」努力の連続であつた。誰もがまだ生きるだけで精一杯であつた当時の窮迫した経済事情の下で、別に準備の金もなかつた貧乏工芸家にとつては、この制作はただただ「悲願の精神に徹するより外ない」、後から考えてみても「完成が奇蹟としか思えぬような」難事業であつたのである。

虚籟の曼荼羅謹作を支援する最初の後援会は、既述のように戦時中、柳原義光が中心となつて発足したが、この後援会は空襲の激化とそれに続く敗戦、柳原の死亡によって立ち消えとなつていて、このため虚籟は、阿弥陀如来の謹作に当つて新たに後援会を作らねばならなかつた。幸い戦後行われた総選挙によつて社会党の国會議員となつた虚籟の旧友・河合義一の斡旋により、昭和二二年秋、河合と高津正道、高野学、上林与一郎が発起人となつて国会内に二〇数名の国會議員による超党派の後援会ができたが、その中には森戸辰男、北村徳太郎、三木武夫のような現職の大老や松岡駒吉、平野力三、吉川兼光といった人々が名を連ねていた。ところが、その翌年の総選挙で社会党が敗北し、後援会員の中から多数の落選者が出て、河合自身も議席を失うという事態となつたので、この後援会は半年を出ずして虚籟の方から遠慮を申し出て消滅することになつた。

二度目の後援会は、虚籟とは旧知の秋田県米内沢の森沢徳蔵夫妻の尽力により、昭和二三年、同県下の秋田、能代、鷹巣、米内沢等の薪炭組合や運送業者を中心に作られた。しかし不運なときには不運なことが続くもので、今度は秋田県下に連續して大火が起り、能代、鷹巣、米内沢の後援者

が次々に罹災し、世話役の森沢自身も米内沢町の再度の火災で類焼してしまった。このため虚籟は、またしても自分の方から後援会の継続を謝絶せざるをえなかつたのである。

しかし虚籟は、そうした不運に逢えば逢うほど、大藏經の出版に生涯を捧げた黄檗宗の僧鐵眼の故事などを思い浮べては、自らを励まし、昭和二四（一九四九）年の春、三度日の後援会を千葉県船橋市の理髪師平野忠松に依頼して組織し、材木商川口重二らの協力によつて得た資金で辛うじて制作を進めることができた。しかし、それでもまだ完成を見るまでには至らず、最後は自分のもてる物一切をこの悲願曼荼羅中尊阿弥陀如来に供養する覚悟で必死に精進努力したのであつた。

後年虚籟は、この頃の生活を回顧して「曼荼羅謹作発心以来の最大の難所」であったと言い、この苦境の乗り切りに当つて、彼が郷里鶴岡に疎開の折、芝増上寺の隣にある徳川家御靈屋瑞蓮院の老師糸山篤恂の餓^{はなむけ}の言葉が大きな励ましとなつたと述べている。

糸山老師は早くから虚籟の悲願に深い理解と同情を寄せ、芝から虚籟の工房のあつた目黒三谷町まで一時間余の距離を電車を乗り継いでよく訪ね、作業の進捗をわがことのように喜んでいた。頭に白い子どもが被るような帽子を頂き、藁草履をはいて竹の杖をついたその短軀微笑の姿は、まことに良寛を偲ばしめるものがあつたといふ。その老師が虚籟の離京に際し、一日静寂な瑞蓮院の書院で老師手製の胡瓜なますと浅草海苔を肴に、虚籟と冷酒を汲み交しながら言った。

「遠藤さん、貴方だからこの一大悲願も必ず成就されるでしようが、しかし何しろ現代のような世相にあつてこれだけの大事業を完成しようとすると、餓死の覚悟がなくてはなりますまい」

「ありがとうございます。お仰せを堅く心に刻んで、その覚悟で精進致します」

そう答えたものの、この餓死の覚悟は実際となるとなかなか容易なことではなかつたが、さすがに彼も阿弥陀如来謹作の時ばかりは、あるいはその運命となるかもしれないと思つたのであつた。だが虚籠を悩ましたのは、そうした外患だけではなかつた。普通の家庭の常識からすれば明らかに無謀としか言えないような虚籠の一途で過激な生活は、当然に家庭の内部に軋轢を生むことになり、しだいに家族が取りかえしのつかぬ崩壊へと向いつつあつたからである。

一方、助手の秋野にとつてもこの時代は最悪であつた。暖国育ちの彼女にとつて慣れぬ雪国での耐乏生活はことのほか厳しく、仕事の重圧と家庭内の葛藤に捲きこまれて身心ともに消耗した彼女は、将来に絶望して心底この生活が嫌になり、故郷の母から彼女の身を案ずる手紙が来たのを機に、一人で鶴岡から千葉まで歩いて帰ろうとまで思いつめていた。既に父は亡くなり、長兄も戦病死して、実家も彼女にとつて昔のように頼れるところではなくなつていたが、ともかくここを離れて故郷に帰りたかったのである。しかし、黙つて去つては悪いと思い、疎開以来親しくしていた鈴木医院の院長未亡人にそのことを告げたところ、同女からいまあなたが去れば虚籠の悲願はどうなるのか、あなたの苦労は必ず分つて貰える時が来るからと強く説得され、辛くも思い止まつたのであつた。

このような虚籠の窮状を見た櫛引町丸岡天沢寺の住職斎藤隆参は、「我等仏に奉仕する僧侶の身として仏如來の謹作にかくの如く苦心するのを黙視することはできない」と言い、檀信徒をまわつて四度目の後援会を作り、零細な淨財をあつめて虚籠を援けた。こうしてついに、昭和二五（一九

五〇）年三月三一日の明け方、縁飾りを含めて縦一丈横七尺の巨大な『綴錦曼荼羅中尊阿弥陀如來』が出来上がったのである。この時虚籟六〇歳、秋野四二歳であった。

「曼荼羅雜想の一節」

完成した尊像は、まず鶴岡ユネスコ協会によつて展示会が行われ、次いで酒田市の海晏寺と櫛引町の天沢寺で開眼供養が行われた。この時の経緯と感慨を虚籟は次のように書き記している。なお文中にある菅原兵治は鶴岡での虚籟の後援者、石井蓉童は虚籟の東京時代の尺八の師匠で、虚籟は尺八でも相当の名手であつた。

己が祖国の興隆を喜び、己が祖国の崩壊を悲しむ——こうした事は、世界各国民すべて共通普遍の心理である。誠に「人間」の天性だからである。

一軒の家庭だつてそうだ、その家の繁栄と、衰微とに対し、己れ一個の感情や、打算から、その喜びや、悲しみを逆にするものがあるならば、それはまさに異状精神の所有者か、或は変質者であろう。人間の生死に対する、心情も亦同じ事である。

第二次世界大戦を契機として、我国は、兎も角世界一流国家に伍して居たものが、一落千丈、現在のようない状態を招來したのである。これを身と心とを以つて経験し、然も、祖国観念や、愛国精神を有つてゐるものにとつては、誠に黯然たらざるを得ないのが当然であろう。

この祖国の興亡成敗は、我等国民の反省に何を与へたか——その結論は、戦争放棄、文化国家、平和国家の建設を以つて、今後我国の国是とする新憲法を制定し、そしてこれを実践することによつて、祖国再建の基盤とすることになつたのである。

更に、民主國家への時代的変遷は、こうした國家と國民との關係を、國民すべてが認識し、その立場立場に於いて実践しなければならないのだ。

その朝（去る四月四日）——過ぐる大戦中、藝術保存の特典を与へられた事を動機として、長い間の念願であつた、戦争犠牲者万靈供養、世界平和祈願、綴錦曼荼羅中尊阿弥陀如來像も、漸く出来上つたのでその前に独座し、こんな事を考へながら——いさゝか自分の責務の片鱗だけでも果さして頂いたような、そしてまた放浪の旅人である我人生行路の一節を省みて、静なる微笑をさへ禁じ得ざるものがありました。

その日は、阿弥陀如來の展示会を開催する事になり、九時開場前のひと時でした。処がまだ八時だと云ふのに、飛び込むように入つて来られた方があるのです。それは、菅原兵治先生でした。

「口今ラジオの放送を聴いたもんですから——まあお目出度う存じました。」

「ありがとうございます。お陰様で何うにか出来上りました——どうぞ……。」

先生は、阿弥陀様の前に座られ、暫くの間、じつとご覧になつて居られましたが、

「この前の献上仏の如意輪觀世音様のときは、『慈』いつくしみと云ふものを強く感じましたが、この阿弥陀様からは『悲』即ちかなしみの感じを深く受けるのです。之にはそうした特殊の意識を以つてお作りになつたのですか？」

「いいえ——別にそうした考へを以つて、つくつた訳ではありませんけれど……。」
と、答へたものの、作者にとつては極めて重要なことなので、実は大に心をうたれるものがありました。

「皇太后様への献上仏」と「戦争犠牲者の万靈供養の如来像」——私はこの二つを対照して、幾度か心の中に繰り返しながら、その製作当時の自分の心境を反省して見たのです。

その頃（献上仏謹作当時）私は、一面六臂の如意輪觀世音像について、こんな事を考へて居りました。

この一面六臂は、尊像ではあるが、人生の象徴でもある、そしてその中心をなすものは宗教である。宗教は教派宗派の如何を問はず、その生命は、仏であり、神である。また慈悲であり、慈愛である。

例へば、觀音經の中には「悲觀及慈觀」と云ふ事があるし、聖書には「悲しむ者は幸なり慰めを得べければなり」と録されてある。畢竟八万四千の經典も、新旧約の聖書も教へるところの窮極は、人生にあつては、悲しむ者に対する「慈しみ」、悲しむ者に対する「愛」の心証体現である、そしてこれを象徴する意味に於いて、如意輪觀世音像の場合は、そのお面相が宗教の表現となり、他の六臂は、哲学、科学、芸術、政治、教育、経済等の六部門を象徴してゐる事になる。

だから六臂はそれぞれ、珠数を持つもの、宝珠を持つもの、法輪を持つもの、蓮華を持つもの、また山を按するもの、思惟を表はすもの等によつて、人生に於ける六道の種種相を象徴してゐるのである。

そして、こうした機構から見て——現代は科学文化の最も発達した時代であつて、原子爆弾のような破壊力を有つものまで出現した。これを使はなければならない場合は、実に悽惨な不幸を引き起すのであるが、併しこの原子力を宗教的慈悲、慈愛等の精神を以つて平和的に善用するならば、如何に大なる福祉を人類社会に齎すか計り知るべからざるものがある。こうなると、科学は、宗教と相剋し、或は矛盾すべきものではなく、調和する事によつて、共に人生を幸福にする事になる。

更に、其他の五臂によつて象徴されてゐる各部門も、内に宗教的崇高なる精神を以つてなさるるに於いて、初めて眞の文化的生活、平和的生活が成就されるのである。

と、こうした事を思想とも信仰ともして、献上仏如意輪觀世音像を製作したのでありました。

次に、戦争犠牲者万靈供養、世界平和祈願の綴錦曼荼羅譲作の場合は、念願發心當時既に「悲願」であつたのです。

日本民族未曾有の大苦難時代として、我国の崩壊を来たした大戦争——然も、戦争は日一日と苛烈になり、不安は増大する、そして我等の骨肉同胞は、次々に戦争の犠牲となつて死んで行く——そんな時、縦令私の作品が芸術保存の対象となつても、この貧工芸作家が、戦時戦後の十年を予定して、独力綴錦の曼荼羅を製作しよう等と云ふ事は、全く悲願以外の何ものでもなかつたのでした。併しただそうしないではゐられなかつた処に、私の心の願ひがあつたのでありました。

何年の冬でしたか——食糧補給の為、郷里に旅して、さて重いじやが芋を背負ひ、帰途雪に遮られ、越後湯沢の宿にふるへながら、

曼荼羅織成に加護垂れ給へ諸菩薩と

われ寒空に祈りて居たり

こんな事を口づさんだこともありました。

昭和十九年夏も遅く——当時日本仏教鑽仰会会长だった故柳原義光伯の勧告に従ひ、曼荼羅織成の

為、やがては廃墟と化すべき運命にあつた、住み馴れた東京を後に郷里鶴岡に疎開したのでした。併しあの疎開の日の思ひ出で——強雨の中を徹夜で、目黒三谷から恵比寿駅まで一里余を、荷車を挽いての運搬四五回、遂に精根尽きて、坂路の断涯に車諸共墜落せんとした瞬間、危く路傍の人に救はれたり、疎開はしたものの、長い間異郷の放浪人であつた私には、その冬稀有の大雪に燃料入手の方法もつかず、かくして運んで来た広巾織機二台まで、コマ切りにして燃して了はねばならなかつたのでした。

乍併、仏加護亦無尽——やがて風間家御主人先代幸右衛門氏の仏縁により「そうした曼荼羅をつくるのなら」とのことと、別邸「無量光苑」をその工房として提供せられたのです。この事がなかつたならば、中尊阿弥陀如来像のみならず、献上仏も、マツカーサー元帥へ贈呈された、曼荼羅一部飛天奏楽も、恐らく出来なかつたに相違ないでせう。

仏加護のある処、悲しみも亦限りなく続く——人間界に於ける大激動をよそに、春になれば花は咲く——疎開の翌年でした、昭和二十年五月十三日、知人に誘はれて長沼村長雲寺の大般若法要に参りました。墓畔の桜の花の美しさ、樹頭にある花、風に散る花、大地を埋め尽した花、殊に散る花と、大地を埋め尽した花に、無量の感慨を残して、その日の花は今でも忘れる事が能きないで居ります。

その夜——寺の書院に泊つた私は、春眠暁を覚えずとでも云ふのか、睡醒模糊の間をさ迷ふてゐると、突然枕もとに、

「お父さん」

と云ふ声を聞いたのです。ハツと思ふて見上げると、戦地に行つてゐた長男哲雄が、そこに座つてゐ

るではありませんか、

「オオ、哲雄か、よく帰れたねえ。」

併し、彼はただうつ向いたまま、無言で居る。

「よくまあ帰つて来れたねえ——無事で帰つて来たんだから、こちらで何か仕事でも見付けなければなるまい。」

「…………。」

「缶詰関係の仕事が宜いだらうなあ。」

彼は館山水産学校の卒業生だつた。

「…………。」

「何処か、適當な処をさがそうじやないか？」

矢張り黙つてゐる、暫くすると、ふと私の顔をふり向いたが——何とその顔の青ざめて、さびしそうな事！ そして

「僕は、南に帰らなければならないんです。」

こう云ふたかと思ふと、もう、すうつと立つて、戸の外の方へ行つて了ひました。私は、折角帰つて来て、何も遠い南洋になど行かなくとも、と、思ふたので、

「待てよ——一寸お待ち！」

と、呼び止めたが、彼はもう居なかつたのでした。

「なんだ——夢か。」

我が国の大いな都市は殆ど灰燼に帰し、広島と長崎とは更に世界に於ける、唯一の原爆受難の地となり、國の外と、内とに於ける莫大な犠牲を残して、我が國は、二十世紀の悲劇として完全に崩壊して丁つたのであります。

かくて、その年の八月十五日を以つて、流石世界に大激動を与へた、第二次世界戦争も終りを告げたのでありました。

諸行無常——歳月は静に、併し休みなく流れ行く。その十二月のある雪の降る日でした。鶴岡市役所から吏員が訪ねて来て、

「誠にお氣の毒ですが、只今、お宅の哲雄さんが、戦死されたとの通知がありましたので、お知らせに参りました。」

「あ、そうですか——何時、何處で御座います？」

予期してゐた事ではあつたが、心臓が動悸する。

「処は、マロエラツプ環礁のタラワ島で、時は、今年の五月十三日だつたそうです。」

そう云ひると、吏員は帰つて行きました。

五月十三日——私は早速曼荼羅日記を繕いて見ました。忘れるともなく、つい忘れてゐた五月十三

日！それは、過ぎし春、長沼の長雲寺の大般若法要に參つた、あの朝の夢を見た日だつたのです。

「随分、我儘な奴だつたがなあ……。」

こう独り言を云ふ、私の目からはとめどもなく涙が流れおつるのでした。随分我儘な奴ではあつたが

——戦地に行くようになつてからは、「國に捧げた私の身には金は要らない」と云ふので、極めて零細

な俸給（彼は海軍兵曹だつた）も、手当も、賞与の国債まで、すべて、貧しい私の曼荼羅謹作費のた
しにして呉れとて、送つて来て居りました。

私は、静に、我師石井蓉童先生から特に譲つて頂いた、二尺の愛管を出して「虚空鈴幕」の一曲を、
彼の靈前に手向けたのであります。が、併しこんな事は、私の身近かに起つたささやかな只一つの出
来事にしか過ぎないのであります。より遙に悽絶、慘絶とも云ふべき出来事が、この度の戦争によつて日本
だけでも何れ程あつたか分りません。更に世界各国の犠牲に至つては、到底、只驚くばかりであると
思ひます。

戦争犠牲者を「悲しむ心」——これが万靈供養の心であり、更に、この心が世界平和祈願の根本的
心なのであります。こうした「心」を以つて然もこの度の戦争を経験し、その戦争を背景にして謹作
した曼荼羅中尊阿弥陀如来であります。

菅原先生のお言葉の示唆によつて、献上仏、供養如来に対する作者としての製作経路を反省し、そ
して更にすべてに対する感謝を新にしてゐる次第であります。

（『曼荼羅雑想の一節』）

百力寺巡礼

虚籟は新生日本の将来が世界平和の建設に対する積極的な貢献にかかるといふと考えていたので、
戦後世界における世界平和のための国際組織として、「国際連合」と、わけても国連の教育科学文
化機関である「ユネスコ」の活動に、多大の関心と期待をもつてゐた。このため昭和二四（一九四
九）年に鶴岡にもユネスコ協力会ができると、その初代会長となり、以来国際理解と平和愛護の精

神に基づくユネスコの諸活動に率先して参画してきた。また、こうした事情もあって、かねてより彼の曼荼羅中尊阿弥陀如来が完成したあかつきには、それをもつて人類最初の原爆被爆地である広島と長崎を訪れ、犠牲者の供養を行い、そのあとこの尊像を国連の本部か広島、長崎のしかるべきところに奉納したいと考えていた。

そこで、いよいよ阿弥陀如来が完成して郷里での開眼供養が了ると、虚籟は念願通り戦争犠牲者の万靈を供養し、あわせて悲願の一部達成を感謝するために、この尊像を携えて、秋野と共に自力寺巡礼の旅に出立したのである。

彼等は約二貫目ばかりある阿弥陀如来の本体を長さ五尺余の巻物にし、これまた二貫目ほどある上下左右の縁飾りをボストンバッグに詰め、虚籟が巻物を肩に担ぎ、秋野がボストンバッグを持つて、梅雨期に向う折から番傘を抱え、鶴岡から千葉、東京、京都、大阪、兵庫を経て広島まで、各地の後援者や知人を頼りに、その地の市役所や寺院を訪ねては曼荼羅謹作の趣旨を話し、阿弥陀如來を展覧して共に慰靈と平和を祈願する行脚を続けたのである。

しかしながら、この道程で虚籟の志と芸術に感銘を受けた京都市長高山義三から京都にアトリエをもつよう奨められたり、大阪市長近藤博夫から次の大作の折には後援しようと励まされたり、姫路市長石見元秀に新築された白鷺城迎賓館に備付ける綴織三曲衝立の制作を頼まれるということがあつたが、虚籟の心はどうしても梅雨空のように重く暗くなりがちであつた。それは、この間の精神的肉体的な過労による疲労に加えて、虚籟のねがいとは逆に、世界の情勢が再び米国とソ連の政治的軍事的イデオロギー的な対立を軸とした東西世界の「冷戦」に発展し、まだ国内の戦禍の傷痕

も癒えきらぬこの年の六月、ついに朝鮮戦争が勃発するに至つたからである。

彼等が広島に入った日は、あいにくの土砂降りであった。このため予定していた森戸辰男を広島大学に訪れることもできず、駅の待合室に降りこめられて雨に煙る市街を眺めながら、原爆投下の日を追想し、居合せた引揚者と覺しき一群の力ない放浪者たちに己の見すぼらしき姿を重ね合せては、我もまたいつ果てるとも知れぬ曼荼羅順靈の流浪の旅人であることを思うと、さすがに心細く、気持が滅入るのであった。そして、降りやまぬ雨に、他に紹介された人のあることを思い出して夕暮の広島を汽車で発つたが、結局その夜は岩国の駅で一夜を明かし、翌日再び広島に戻つて、市役所、広島大学、爆心地を訪れた後、ひとまず身心の極度の疲労と雨期を避けて帰郷すべく、この旅を中止したのであつた。

広島からの帰途、東京に立寄った虚籟は、松岡駒吉を自宅に訪ねて阿弥陀如来の完成を報告したが、松岡は彼ら一人の巡礼行にいたく同情して言つた。

「そうして諸国を万靈供養に行脚なさるのはまことに大変だろうから、東京では築地本願寺あたりで戦没者の供養をなさつてはいかがですか」

「私も願うところですが、そのつてが私にはできませんので——」

「それでは一度帰宅して体を休め、秋にでもぜひこうなさい。その準備として官房長官の岡崎勝男さんと東京都知事の安井誠一郎さん、新聞会長の馬場恒吉さんに紹介状を出しておきますから、お訪ねしてお頼みしてごらんなさい」

ということになり、この松岡の親切な計らいに感激した虚籟は、早速三人を訪ねて助力を乞うたのであつた。

虚籟は後にその時のこと回想して、当時読売新聞の社長であった馬場恒吉を訪ねた時、彼ら二人の姿と彼らが携えた尊像を見た馬場が、ワイシャツのポケットから百円札をつかみ出し、「これは少ないけれども御布施です」と渡してくれた時は、思わず目頭の熱くなるのをどうすることもできなかつたと書いている。

国連本部へ贈呈

こうしたことがあつて程なく、虚籟の謹作した『綴錦曼荼羅中尊阿弥陀如来』は、仏教連合会と日本仏教鑽仰会によつて、第二次世界大戦の犠牲者の冥福を祈り、あわせて国際連合の平和努力に対する感謝の意思を表すため、全日本仏教徒の総意として国際連合本部に贈呈されることになつた。

これは、戦後間もなく、日本仏教鑽仰会の中山理々らが全国四四の本山名刹の賛同を得て、彼我一切の戦没犠牲者を供養し、仏陀の慈悲の教えと、日本民族が古くから仏教に帰依して平和を希つてきたこととを世界人類に知つてもらおうという意図をもつて、国連本部に仏陀の尊像を贈呈する運動を起したところ、当時の国際関係を慮つた政府機関の意向もあって講和条約締結までその実行の自肅を余儀なくされたのであるが、ようやく対日講和の機も熟し、かつまたこの年国連本部の新庁舎がニューヨークに落成することになったのを機会に、往年の運動の再現として、虚籟の謹作した尊像を国連本部に贈呈し、全世界の人類の代表者に怨親平等彼我一如の釈尊の教えと戦争を放棄

した平和日本の精神を、日本独特的芸術を通して感じとつてもらおうということになつたのである。

虚籠の謹作した阿弥陀如来像の国連贈呈が決まるに、その年の一一月四日、築地本願寺において阿部慶昭輪番が導師となり、仏教連合会、仏教懇話会、日本仏教鑽仰会の主催による仏陀尊像贈呈式法要が行われることになつた。新聞報道によれば、当日は都内仏教各宗の僧侶や来賓、一般参会者多数が参詣焼香し、宝仙高等学校生徒が仏教歌を捧げてまことに厳粛な式典であつたという。

引き続いて一一月五日には、京都東本願寺、六日には西本願寺、七日には奈良興福寺においてそれぞれ尊像の展観が行われ、多数の仏教関係者、一般市民が拝観、焼香した。

更に一一月一二日には大阪四天王寺本坊で出口常順執事長が導師となつて、法要を厳修、翌二三日には京都で、午前中京都女子大学講堂に尊像を安置して女子学生二千名が拝観、午後は知恩院において岸信宏門主が導師となり、京都仏教会及び関西仏教学生連盟の主催で約一千名が会同し、厳かな中にも華やかな贈呈式が行われた。

また一五日には、早晚より初雪が降り始めた高野山金剛峯寺において、和田性海座主が導師となり、高野山大学、高野山高校生徒が参列して慶讃式が行われ、一七日には名古屋市東海学園で、愛知県仏教会及び中部仏教青年連盟主催で一千名が集い、安田力東海同朋大学長が導師となり、津島女子高校、桜花女子学園並びに東海学園の男女聖歌隊も加わって厳粛な式典が営まれたのであつた（「教学新聞」昭和二十五年一一月一二日、二二日）。

この後、この尊像は仏教懇話会の吉田敬直が持参して渡米、国連本部と折衝の上、翌昭和二六年（一九五二）年一月二九日、新装なつた国連本部事務局ビルで贈呈式が行われた。当日は国連本部

側からはベンジャミン・コーエン事務副総長、ワーレス・ハリソン企画部長その他が立会い、吉田が日本仏教徒から国連へのメッセージを朗読してコーエンに手交、コーエンから「日本国民が国連に対し強力な協力と深い関心を示されたことをよろこぶ」旨の謝辞があつた（「毎日新聞」昭和二六年二月九日）。

こうして虚籠が全世界の戦争犠牲者万靈の冥福を祈りながら右手の爪で一本ずつ心血を注いで織り上げた弥陀の尊容は、世界平和を願う日本国民の証しとして正式に国連本部に受領され、対日講和に先立つて国連本部の一室に飾られることになったが、これは当時まだ連合国の大日本感情がきびしく、日本人を好戦的な国民と考える先入観が一般的であったことを考へると、日本の国際社会復帰の陰の環境づくりに果した貢献は大きく、戦後初めて日本の大衆の名において国際社会に向つて発信された世界平和の理念の表現としても、まことに意義深いものであつたと言つてよい。

家族離散

阿弥陀如来像が無事国連本部に受理されたことを知つた虚籠は、その時の感慨を次のように書いてゐる。

「ささやかな私の工芸ではあるが、ともかく民族未會有の苦難時代の發願發心でもあるし、殊に時代の推移が文化國家、平和國家の建設を以てわが國の国是とすることを新憲法によつて世界に約束したのであるから、私はこの曼荼羅中尊阿弥陀如来が新生日本人としての立場から文化と平和のために幾

分でもお役にたつていただきたい願いであった。だが国連当局は——日本が未独立国であり、その上つい最近まで日本と対戦した国々もたくさんあるし、そうした生々しい感情をもつてゐる国の方が——果たしてこれを受理してくれるか、殊に新装なつた国連本部にこれをかけて下さるかどうか、まことに案ぜられるところでした。けれどもそれが二月九日付毎日新聞の記事で〈綴錦織仏陀尊像新装成った国連本部へ〉との見出しで、しかも〈全世界戦没者の冥福を祈り〉と特に大きく表はし、贈呈式の写真まで掲載されてあるのを見るに及んで、これまでの苦労も忽然として消え失せた思いであります。そして感じたことは、一個の人間として、日本人として、また工芸家として六十年生きながらえた私は、これでまことに生き甲斐があつたといふことでありました。（中略）人生を旅と観じ、そして全世界の戦争犠牲者の万靈の供養と平和祈願のための綴錦曼荼羅謹作に一生を托している曼荼羅行者の放浪の旅の何とありがたいことであります。次は曼荼羅中央部阿弥陀三尊の両脇侍、觀世音、勢至両菩薩像を謹作して、願はくばこれを国際連合本部の中尊如来の両側に嚴飾させて頂きたいのであります。

（昭和二六年三月二〇日）

しかし、現実の生活は、このときから虚籠にとつて更に苛酷なものへ暗転することになる。その手はじめは、支払われるはずの阿弥陀如來の制作費が事情あつて直ちに全部入手できず、生活が更に困窮化したことであり、次に彼等の理解者であつた風間幸右衛門が亡くなつて無量光苑から立ち退かねばならなくなつたこと、更にそれに追い討ちをかけることになつたのが妻いく子との破局であつた。

無量光苑の立ち退きで行き場に困つた虚籠は、空き寺を探し堂守になつて制作を続けようと考え

たが、そうした生活に疲れ果てたいく子は、これを機に虚籟と別れて郷里福島に去った。虚籟は激怒し、落胆したが、如何ともなし難かった。すでに虚籟の三人の子どももそれぞれに独立して家を出てしまい、虚籟と曼荼羅行旅を共にすべく残ったのは秋野だけとなつた。一〇月末、虚籟は知人を頼つて転宅を試みたが、すでに雪の降り始めていた寒空の下を、秋野と共に荷車を引いて移動中、さる神社の前で行き暮れて途方にくれていたとき、彼等の窮状を見かねて再び援助を申し出たのが天沢寺住職の斎藤隆参であつた。

こうして天沢寺の庫裏を借りて落着いた虚籟と秋野は、隆参をはじめとする土地の人びとの善意に支えられて曼荼羅中央部『脇侍觀世音菩薩』の謹作にとりかかり、一二月、天沢寺において檀信徒が参集し、隆参によつて始織の法要が行われたのであつた。この頃の彼の日記には、この間の彼の精神的苦悩と共に、彼が近隣の人びとの米一升、餅一かさね、野菜一かごの零細な、しかし暖かい寄進に支えられて、隆参と共にいかにしてその悲願を達成するか、後援組織の再建に腐心しているさまが綴られている。

翌昭和二七（一九五二）年一月、虚籟は隆參と共に雪中近隣の町村に托鉢に出たのがもとで風邪をこじらせ、喘息状態となつて五〇余日を病臥することになるが、このときばかりはさすがの虚籟も度重なる心身の疲労で困憊し、もはや脇侍觀世音の謹作は不可能ではないかと思いつめて一度までも遺書を書き、周囲にも虚籟の再起を危ぶむ嘆が流れる有様であつた。

そうした折に、秋野の母から秋野に手紙が届いたが、そこには「そのままで雪に埋もれて生を終ることになるのではないかと憂うる」という、子を想う母の慈愛をこめた切々たる文字が綴られ

ていた。虚籠もまた、過ぐる築地本願寺での阿弥陀如来贈呈供養の法要で会った帝展時代から旧知の実業家故青木為雄の夫人から、「あなたも比の度多年の念願を成就したのだから、これからは少しうつくりと実用的な作品を作つたらどうか。昔のようではないが自分にも心当りがあるので、作品のお世話をあげよう」と言われたことや、他の知人から綴織の講習会をしてくれないかと頼まれたことを思い出し、かつまた健康上のことも考えて、秋野と共に曾住の地である房州へ行こうと思ひ立つたのである。

再び館山へ

昭和二七（一九五二）年七月、虚籠と秋野は「曼荼羅を造るなら私の寺で織りませんか」という慈恩院住職石井潛龍を頼りに、千葉県館山に移つた。館山では潛龍や旧知の館山病院長穂坂與明、副院長川名正義らが暖かく迎えてくれたが、彼等の館山移住後、虚籠のことを書いた記事がある新聞の全国版に出るという事件が起つた。虚籠の家庭が崩壊したことは、既に鶴岡でも名士のゴシップとしてさまざまな憶測を生んでいたが、それが新聞種になつたということに虚籠はいたく傷ついたようである。もつとも、その記事は今日の水準で言えば全く中傷とは言えない程度のものだつたようだが、まだ世間が離婚自体にやかましい時代であつたこともあつて、この話は館山でも噂されることになつた。恐らく虚籠はその記事によつて自分が一方的に世間から不徳漢と決めつけられ、彼のこれまでの芸術もろとも全面否定を受けたようを感じたのであろう。彼に同情した潜龍は、そのとき窓外の烟を指して、「先生が新聞で悪しきまに書かれた結果、先生を世話するならこの寺を

出て行けと檀家衆がもし言い出したら、私は寺を出る。ただし、ここは私の畠だからそこにバラツクを造つて、そこで曼荼羅を織つてもらいます。もし制作費がなくなつたら私が托鉢をすればよいから、安心して織つて下さい」と励ましたという。

慈恩院は里見氏の居城のあつた館山城跡の麓にあり、すぐ横に火葬場があつて、荼毘の煙がよく流れてきたが、そのような時には、こう心弱くてはとうてい世界平和祈願の曼荼羅謹作なぞといふ大げさな念願、行者を自任することはできないと知つてはいても、虚籟はやはり暗い気持にならざるをえなかつたのである。

そうした中で再び虚籟に制作の勇気を取戻させることになつたのが、潜龍の仲介でアメリカ海軍横須賀基地司令官マクマネス中将に贈ることになつた綴錦『一葉觀音』の制作であつた。

当時、潜龍は不戦と平和の鐘を造る運動を提唱して、横須賀基地周辺で托鉢と宣教の活動を続けていたが、その時彼の主旨に共鳴して喜捨してくれたのが、通りがかったマクマネスであつた。以来、彼等は互いに親交を結ぶことになるが、マクマネスが帰国するとき記念品として海に因んだ一葉觀音像を潜龍が贈ろうとしたのである。この尊像は同年の冬に謹作されて翌年の晩春に米国に届けられたが、その折のマクマネスとその夫人から寄せられた心のこもつた感謝と、潜龍からきいた虚籟の悲願に対する彼等の共感の手紙に、虚籟は深く慰められ励まされたのである。

『脇侍觀世音菩薩』の謹作

その後虚籟は、慈恩院から館山市八幡の宮本進の持家に工房を移していよいよ本格的に脇侍觀世

音菩薩の謹作にかかつたが、この制作を支援したのが、杉野喜精の元秘書であった手塚庄次郎であった。手塚は往年、栃木県の出流山満願寺に籠つて断食供養をした結果、医者も見放した胃潰瘍を治癒したのが動機となつて熱心な観音信仰者となつた人で、虚籟は手塚に伴われて満願寺を訪れ、山主の竹村智蓮に会うが、この老僧の人柄にすっかり感動した彼は、尊像完成後はこれを同寺に奉納することにしたのである。

虚籟は当初この観世音菩薩像を白衣の觀音に織るつもりだつたらしく、館山から鶴岡の地方誌に送つた短信の中で、その構想の由来を次のように記している。

「……無量光苑にいたある年の正月である。一日も三日も婆娑との音もなく、静かに牡丹雪が降り続いていた、そして地上一切の雜物、雜色は純白の一色に清淨にせられた時、庭の東北にあつた高野楨の一本が掩われた雪によつて恰かもそのまま白色の船底光背の前に佇み給う白衣の觀音の御姿に嚴飾せられたのである。何たる莊嚴！　まさに天上の織り成せる尊像である——しかも刻々に移り行く暮色にひたされて、尊像は愈々幽玄さを加えていた。私はただ茫然その前に立つたのである。

やがて庭の片隅にある大きな櫻の南の方、微かに棚引く雲間から玲瓏たる十五夜の月がしづしづと昇つて來た。尊像の外廓は底知れぬ紺青の虚空の色。それは「無限」と「永遠」とを思わせるものであつた。そしてそこには宝玉をちりばめたような無数の星が燐然としてきらめいている——やがて皎々たる月光が後方からその尊像を照らした時、尊像は崇巖無類なる白光仏となり、恰かもコロナのような靈光を周辺に發散する、その麗觀、その美觀、まさにこの世のものとは思われないのであつた。私はただ静かに合掌した。こうした麗感は、雪のない南の国では到底受けることはできないし、それだけに私はその忘れ難いインスピレーションを尊い御仏の示現として心に抱いたのである。

ふる里の鶴岡の、雪降る冬の日の無量光苑でのその時の思い出を辿り、白光の聖観音の尊像を純白の絹糸と、わずかに青墨の単色の色糸を以て謹作することを、今後の畢生の念願として、今私はその構想を練り、下絵を描きつつある……」

しかし、それから足かけ四年かかって実際に彼が織り上げた『脇侍觀世音菩薩』像は、彼のもてる力と色糸のすべてをこの一作に集中したかにみえる、まばゆいばかりの豊饒な色彩に溢れた莊厳華麗な尊像であった。幸いにしてこの尊像は、虚籟の現存する作品中最も保存状態のよいもの一つであつて、文字通り昭和の至宝というべき出来上りであったが、事実、虚籟はこの尊像の謹作に総てを使いつくしたために、次の『脇侍勢至菩薩』は貧窮の極に白糸だけで織らねばならなくなるという、更に難しい課題を負いこむことになつたのである。

この縦八尺四寸、横四尺二寸の尊像は、昭和二十九（一九五四）年四月に完成、京都の智山派総本山智積院において御嶽隆道管長によつて開眼法要後、同寺で一般に展観され、大本山永平寺、總持寺をまわつて、手塚によつて満願寺に奉納されたのであつた。

清賞の日々

館山での虚籟と秋野は、穂坂與明と川名正義が作つてくれた綴織頌布会の需めに応じて綴織の帯やハンドバッグ、ネクタイを織つて生活の糧としたが、東京や大阪、京都と違つて館山では綴織に対する認識も薄かつたので、いきおい価格も低くしなければならず、さりとて安手のものを作るの

は、虚籠にとつても秋野にとつても芸術家としての良心が許さなかつた。その結果はいつも作者の出超で、生活は一向に楽にならなかつた上、貴重な芸術作品が嘘のような値段で散逸していくことになつた。

さすがに秋野は、こうした状態で埋もれていくことを憂えて、虚籠にもう一度東京に行こうと言つたが、虚籠はしかし頑として承知しなかつた。虚籠も秋野も、もともと装飾性にすぐれた作品を得意としていた作家であつたし、ようやく日本が復興して豊かさに向つて突き進みつつあつた時であるから、彼等が上京して時流に乗れば、生活が楽になることは目に見えていた。また、周囲にも強く虚籠に美術界復帰を望む声があつたことは、当代の作家を論じた次のような記事にも窺うことできよう。

「造型美術において山形県は瘦土のようである。日本画に小松均、根上富治、洋画に椿貞雄、土田文雄、彫刻に石川確治、新海竹蔵の名をつらねているが、これらは一方の部隊長たるに値するが、全軍の総帥たるにはツブが小さすぎるようである。この中から現役の活動的なところを選べば、まず小松、新海あたりか。（中略）こんな訳で私は誰れをベストに推すべきかに迷つた。そこで方向を変え、綴れ織の遠藤順治あたりを推し上げたら恨みつこがなくつてよろしかろうと思ついたわけである。現在、彼は郷里鶴岡に帰り、ユネスコ協力会長などをやつてゐるそうだが、そんなもの——といったらユネスコから叱られそうだが、彼の天分からいえば、そんなものだ——には他に人がある。ゴブランと並称される綴れ織は、彼をおいて、かけ替えがない。彼が死んだら伝統の古い綴れ織も終止符をうつことになるだろう」。（「郷土の人物ベスト・テン」山形県の巻「サンデー毎日」昭和二六年八月三日）

それでもなお虚籟が上京しなかつたのは、一つには既述のように帝展、文展時代に彼が味わつた美術界内部の派閥的な暗闘に嫌気がさしていたことであり、それにも増して安樂な生活や作家としての名声に対する執着と彼の曼荼羅謹作の悲願とは両立しないこと、この時代に本当に創造的なことをしようとする清貧を覚悟しなければならないことを、はつきりと自覚していたからであろう。それだけにまた、虚籟は私心なく自分と交わってくれ、自分の芸術を理解してくれる人には小児のような感激をもつて応え、精魂こめた作品を惜し気もなくくれてしまつた。

このようなわけで、彼にとつては、温暖な気候と、貧乏ではあっても曼荼羅制作に集中できる館山の生活が有難かつたのである。もつとも、それは虚籟のこころを理解し、愚痴ひとつ言わずにつめて明るさを保ち、献身的に働くことを厭わなかつた秋野という稀有な人物がいたから可能であつたことは言うまでもない。

『脇侍勢至菩薩』の謹作

昭和二九年八月、虚籟は手塚の妹吉村りうの依頼で、両脇侍の残り『勢至菩薩』の謹作に取りかかつた。秋野の述懐によれば、このとき彼は前作の觀世音菩薩像と同様、多色の尊像を制作したかったようだが、そのためには資金が足りぬ上に、すでに貯えの色糸は前作で使い果していった。彼は秋野と相談の上、縁飾りのみを色糸で織り、本体は白糸だけで、糸の染め上がりの際にできるわずかな色合いと濃淡の違いを使い分けて造像しようと決心したが、いざ実行となるとさすがに彼等も不安で成功の自信がなかつた。

そこで彼等は、白衣を肉眼では一見見分けのつけ難いわずかな差異に従つて幾通りにも分類し、それぞれの色巻きに番号をつけ、この番号に基づいて制作に際して微妙な明暗を間違えぬよう、細心の注意を払つたのであつた。こうして織り始めてから、初めて織機を恐る恐るのぞいた時、尊像の足がふつくらと出来上がつてゐるを見て、二人は漸く安堵し、心から喜び合つたという。

この縦八尺四寸、横四尺二寸の勢至菩薩像は、それから三年の歳月を経て昭和三二（一九五七）年三月に完成し、吉村りうによつて東京浅草の浅草観音堂に奉納されることになつたが、この清淨莊嚴な白衣の尊像は、前作とは対照的な彼の畢生の傑作となつた。ときの浅草寺貢主清水谷恭順は、「普明照世間」の書を贈つて虚籟の労苦を讃えている。

この尊像の奉納に先立つて、虚籟は当時まだ大学院生であつた私と共に、禅仏教と茶道の哲学で周知の久松真一を京都に訪ねたが、久松は虚籟の悲願を知つて相国寺管長山崎大耕、京大教授上野照夫、片岡仁志と共に発起人となり、同年七月、相国寺塔中大光明寺でこの『脇侍勢至菩薩』像の展観が行われた。この展覧会は、虚籟にとつてはまことに忘れ難い生涯の快挙として、彼は終生この時の久松の厚意に深く感謝したが、それは何よりも学歴がないために美術界の孤児の道を歩まなければならなかつた虚籟が、綴織の本場である京都で、純粹に美と學問を愛する人びとから、自分の仕事がその志と共に芸術としてはじめて評価してもらえたという思いが、一入強かつたからである。

こうして虚籟は念願の綴錦曼荼羅中央部三尊仏を完織したが、曼荼羅謹作を発願してからすでに一七年、三尊仏だけでもこの間に一〇年の歳月が流れていた。虚籟ははじめて安堵し、「これで自分もやつと芸術家として満足できる作品を後世に残すことができた」と言つて喜んだ。そして、秋野が思わず漏らした「私は何もできなかつた」というつぶやきに、「何もしなかつたのではない。これはみなあなたがいたからこそできた仕事ではないか」と叱つたという。

このとき虚籟六七歳、秋野は四九歳になつていた。

しかしながら、当時の虚籟はすでに多年の過労から高血圧症に苦しみ、いやでも体力の衰えを意識せざるをえなくなつっていたのであろう。それと共にただ作品さえ造ればよいといつこれまでの彼の生き方にも、ある種の迷いが生じたようと思われる。

もともと虚籟の曼荼羅謹作は、永久的な世界平和は敵味方の差別なく戦争の犠牲となつたもの紹介を悼む心の上にのみ築かれるという彼の思想の表現であつたから、でき上がつた尊像は秘蔵されるのではなく広く大衆に公開されてはじめてその悲願が達成されるはずであった。したがつて、ようやく曼荼羅中央部が完成した今、彼がその作品を一堂に集めていま一度自分の目で確かめ、またできるだけ多くの人々に見て貰いたいと思つたのは、作者として当然の心情であつたと言つてよい。事実、彼はこの頃より、はじめて個展を開くことを真剣に考え始めたようであるが、しかしすでに内外に散逸してしまつた彼の作品には、それぞれの所有者の事情があつて、この望みも今となつてはおいそれとかなえられそうになかつた。また、作品の中には所有者が代つて行方不明のものや、国連本部の『中尊阿弥陀如来』のように縁飾りがなくなつてゐるという作者としてまことに不本意

な状態にあるものもあって、ひとたび作品が自分の手を離れれば、それがどう扱われるか如何ともしがたいことを、虚籟はこの期に及んで改めて痛感したようである。

自分の悲願を自由に人々に訴えるためには、自分の自由になる作品をもう一度造るほかはない、そのためには資金的にも他人に頼らぬ全く自由な立場を貫かねばならぬ——こう思い直した虚籟は、翌昭和三三一（一九五七）年から、再び中央に阿弥陀如来、左右に觀音・勢至の両菩薩を配した縦二・七メートル、横一・八メートルの『曼荼羅三尊仏』の下絵に取り掛つたのであった。

昭和三三年、虚籟は館山市から市の無形文化財第一号の指定を受けた。また、これより先、同市八幡区は彼を名誉区民にしたが、彼はそうした人々の善意に励まされて最後の大作に備えるべく、穂坂が組織してくれた「帯の会」の注文に応じて積極的に帯やハンドバッグを織り、また少しでも資金の足しになればと考へて、旧著『順靈の跡』の再刊を計画したりした。

しかし、こうした努力はすでに老境に入っていた虚籟の体力の限界を超えていたのであろう、彼は昭和三四年五月、でき上がった作品を依頼主に届けた晩に軽い脳卒中を起すが、駆けつけた穂坂の安静の指示と秋野の制止をきかずに動いたため、翌朝大出血を起し、幸い生命はとりとめたものの、ついに右半身不随となつて病臥することになったのである。

『天平の春』

結局このときの後遺症から回復するため、虚籟は一年半の闘病生活を送ることになるが、この間の秋野の苦労は大変であった。彼女は後に「遠藤は織ることができなければ生きていっても仕方がな

いと考えるような人でしたので、自殺しないかと心配で家中の刃物を隠したり、薬を病院に貰いに行くときも、走って往復致しました」と語っている。この彼女の献身的な看護のおかげで、虚籠は奇跡的に回復し、八ヵ月後の一二月には床を離れることができた。そして翌昭和三五年五月、彼が再起を賭けて始織したのが『天平の春』であつた。この縦一尺九寸、横二尺七寸の綴錦壁掛は、当初四ヵ月で完成予定のところ九ヵ月かかって昭和三六年（一九六一）年一月に出来上がつたが、虚籠はこの作品について次のように知人に書き送つてゐる。

「あをによし ならの都はさく花の 香ふか如くいまさかりなり 奈良時代の仏教盛時を追想して綴織壁掛の下絵として書いてみたのがこの写真であります。（中略）綴織りより筆で書く方が遙かに不自由で力なくタドタドして居りますから、これが織物になつたら幾分しつかりするのじやないかと思ひますが、さて何うでせうか——」

（昭和三五年三月一五日）

『天平の春』は何しろ私の大病、脳溢血後の長い療養生活から漸く解放とはいうものの後遺症として右半身不自由で、果たしてこのような綴織としては大作を無事完成させられますかどうか一つの試験でございました。それに色調もなるべく派手にとの依頼人の希望でございましたので——なかなか思うようにまいりませんでした。（中略）去年の夏は例年より暑く、冬は近年稀なる寒さでございましたにもかかわらず、九ヵ月もの間、殆ど不休で織り続けることができました。もちろんそれは秋野さんの献身的な御協力をいただいたからですが、——病後の第一作が『天平の春』です。これを織り了えましたとき、出来不出来はともかく、涙にむせびました」

（昭和三六年三月一七日）

「全く穂坂先生、秋野さんのおかげさまによりまして廢人の状態から私は再起させていただいた訳でした。（中略）これならば、要慎さえすれば、今後生命の続く限りは、綴れは織れると大いに意を強う

した次第でございました。次は法隆寺壁画の観音様でございます」

（昭和三六年一月三日）

終焉

それから二年後の昭和三八年一二月二六日、虚籟は最後の綴錦大作『曼荼羅三尊仏』の完成をみることなくこの世を去つた。死因は脳溢血の再発であつた。

葬送は川名正義が葬儀委員長となり、ごく限られた知人たちだけでひつそりと行われ、遺骨は館山市八幡の区民共同墓地に葬られた。

戦中戦後の激動の昭和を、同時代人として、また芸術家として、戦争の責任を誠実に受けとめ、世界平和の祈願に生きた男の、波瀾に満ちた「順靈」の旅の静かな終焉であつた。

虚籟の死後、秋野は「これからは自由に、しかし自分の看護の目の届く所で暮すように」という穂坂與明の助言に従つて、工房を引払い、同じ八幡区内の民家に一間を借りて綴織を続けた。彼女の夢は、虚籟の遺志を引継いで、いつの日か散在した虚籟の作品を集めて彼の回顧展を開くことであつたが、その生活は往時のままの清貧であつた。従つて彼女の夢もいつ実現できるか分らなかつたが、彼女を訪ねた人々はみな、虚籟に随つて順靈の綴錦織のために總てを捨て去つた、穏やかな中にも凜とした彼女の姿にうたれぬ者はなかつたという。

3 遠藤虚籟の平和の哲学と現代

戦争と芸術のかかわりを言う時、多くの人はナチスに抗議したピカソの『ゲルニカ』をあげる。

しかし私は、未来に向つて世界人類の和解と恒久的な平和を訴えるために、名利を捨てて曼荼羅謹作に生きた遠藤虚籟の隠れた生と死に、より強い共感と感動を覚えずにはいられない。なぜなら、自らの特権に甘えず、一人の市民、一人の人間として誠実に戦争と直面した彼の思想と行動に、私は日本人の真情と平和思想の原点を見る事ができると思うからである。

虚籟が亡くなつた一九六〇年代初頭の世界は、第二次大戦直後から始まつたアメリカとソ連の政治的軍事的対立を核とする東西の「冷戦」が頂点に達した時期であり、それがわが国にも反映して、日米の安全保障条約をめぐつて国論が二分し、保守対革新の政治的イデオロギー的対立が激化して事ごとに対決的な状況を作り出していた。その一方で、実生活においては飛躍的な技術革新と高度経済成長が始まり、消費が美德となり、効率とオートメーションが時勢と考えられた時代であった。従つて、このような状況のもとでは、虚籟の仕事が二重に時代遅れで感傷的に思われたのは当然であつたと言えよう。こうして彼の死後、彼も彼の仕事も全く忘れられたものとなつたが、それから四〇年たつた今、われわれは冷戦体制の崩壊と地球規模での環境破壊の進行によつて、戦後世界を支配してきた人間の発想と生活態度そのものが時代遅れであることを思い知るという、皮肉な事態に直面している。

こうした変化の予兆は、一九七〇年代から世界の各地でさまざまな反体制・人権・環境保護運動等の形をとり、国家やイデオロギーの枠を越えて物ごとを柔軟に把え、全人類全地球的な規模で人や物との関係を改めて問い直そうとする変革運動となつて現れ、やがて一九八〇年代から急速に拡まつてついにあれほど強固に思われた東西世界の冷戦体制の崩壊とイデオロギー支配の終焉をもたらしたのである。

この変化の背景には、高度の技術革新の結果全世界の国民が政治的経済的軍事的に密接に相互依存するようになり、核戦争だけでなく人々の日常の営為の相乗によつても近未来の突然の人類の自滅のあり得ることが真剣に危惧されるようになったこと、これまで確実な知識のモデルと考えられてきた自然科学内部における科学革命がある。今日の自然科学的世界像は、かつてののようなニュートン・モデルの法則的で可逆的な因果関係から成る機械論的決定論的世界像から、ケストラーの表現を借りれば、万物がそれぞれに全体でもあれば部分でもある自己矛盾的な性質をもつ実在、「ホロン」として、互いに多重のヒエラルキーを構成し、全体として不断の進化の過程にあると考える方向に急速に變つてゐるといふ。われわれは現在、思考と生活のあらゆる分野で、このような相互依存的、流動的、発展的な世界理解に向つて根本的な発想の転回が生起し、かつ要求されている人類史的一大転換期に居合せていると言つていいことができるし、そこに近代の單なる終末ではない新しい時代の始まり、「ポストモダン」が語られる所以があるのであると言えるであろう。

このようなポストモダンに向つて要請されている思考と生き方の特徴は、近代のそれが基本的に人間中心主義的で技術主義的であり、自然に対して支配的消費的であつたとすれば、人間も含めて

万物が大小の亜全体、宇宙をなすと考える点で全体論的宇宙論的であり、存在するものはみな有機的な相依相成の関係にあるとみる点で共生的養生的であると言つてもよいが、これは虚籠が「宇宙人主義」と呼んだ彼の人間観・世界観の内容と基本的に合致すると言うことができる。その意味で、虚籠は今日からみれば、時代から遅れていたのではなく、かえって時代に先駆けていた人であったと言つてよい。

同じことは彼の世界平和の思想についても言うことができる。

周知のように、戦争は今日に至るも世界の各地で絶えることなく続いているし、戦後のわが国の中和運動も、政治的イデオロギー的な枠組にこだわって分裂するか、感情的な反戦主義にとどまつて結果的に一国平和主義に自閉してきた観があるが、こうした対立や闘争はわれわれが近代的な自我の肯定から出発する物の見方に留まる限り、ある意味で避けがたいことであつたと言うことができる。なぜなら、人間が人間中心主義的となつて自分以上の存在や権威に対する信頼を失えば、エゴイズムとニヒリズムが台頭し、その結果、それぞれの立場や利害を絶対化したイデオロギーと、集団的なエゴイズムを体現した国家が全能となり、紛争の最終的な解決は結局国家どうしの戦争によるほかなくなるからであつて、いずれが勝つても新たな紛争と復讐戦を生んで、平和は常に暫定の一時的なものとならざるをえないからである。

従つて人類がこの悪循環を脱して真の平和に向つて協力できるようになるためには、われわれは近代的な人間中心主義に溯つてその問題性を認識し、発想の根本的な転換を計らなければならぬが、虚籠はそれを宇宙的な生の連関における人間の自覚に、換言すれば宇宙的な広がりをもつ大い

なるいのちへの畏敬としての「順靈」の「行」に求めたのである。

この立場に立てば、生きているのは人間だけではない。この世にあるものはみなそれぞれに存在の理由と権利をもつて互いに連関してあるのであり、人間もまたその一つに過ぎないのであって、われわれはわれわれの計らいと理解を遙かに超えた人や物のおかげによって現にここにあるのである。しかも、このような相互連関の中では、われわれが生きるということは、同時に他の何ものかの犠牲においてのみ可能であり、われわれにはいつもそのものに対する負い目と責任がある。そしてこの自己の存在に対する文字通りの有り難さと負い目を知ることが、人をしてはじめて己の自慢ともさばりの非を覺らせ、己を支えている陰のものへの感謝と、その報恩としての己の手の届く総てのものに対する奉仕を動機づけるのである。ただ遺憾ながら、このようなわれわれの存在を支えてるもの、宇宙的な大いなるいのちへの「畏敬」は、ゲーテが指摘しているように、人間が生まれつきもつてているのではなく、唯一学ばねばならぬものであつて、われわれはそれを損ねる過ちを通して、はじめてその尊さに気づくのである。

従つて、われわれが本当の和解、眞の平和と共生を求めようとすれば、われわれは何よりもこのいのちへの負い目を大切にしなければならない。わけても戦いの過程で犠牲になつたもの総てを、貴いもの、傷つきやすいもの、人間が共に大切に守らなければならないものを身をもつてわれわれに教えてくれたものとして、それへの追悼と感謝を忘れてはならず、そこに敵味方や正邪の差別をつけてはならないのである。「一切の戦争犠牲者の万靈供養の上にこそ恒久的な世界平和が可能である」という虚籠の信念は、従つて決して感傷的な主張ではない。それは近代的な人間の自覚を更

に徹底し超越した深い人間存在の自覚に根ざした現実的な主張であり、原爆に善惡の別をつけたり、特定の国や人間にだけ戦争の責任を限定しようとしてきた世上の平和論や戦争責任論よりも、遙かに深く、遠くを見据えたものだったものである。

虚籠は彼の平和の哲学を、傷ついたもの、悩めるものへの無限の「慈悲」を象徴する阿弥陀如来を中心として、存在するものすべてがそれぞれに所を与えられる仏教的な曼荼羅の姿によつて表現しようとした。言うまでもなく、大いなるいのちについて語つた近代の思想や哲学は他にもあるが、その場合の生はニーチェのそれが典型的であるように、「権力意志」として表されるような絶えず進化する強くたくましい生であった。しかし、そうした生のイメージに基づく思想と行動がその後の強者による力の支配、打続く戦争と地球規模での乱開発に關係があるとすれば、慈悲において示される生は、それとは逆の遙かに精妙で移ろいやすく、われわれに委ねられ、われわれに責任のある貴重なバランスとしての生である。それはまさしく人間の欲望と技術が人間の統制をこえた力と速度で地球そのものを破壊しかねぬようになつた今日の世界の姿を如実に示すものであつて、それゆえにこそこの時代の人間の倫理は、何よりもこのわれわれに委ねられた傷つきやすきものへの負い目と責任に、換言すればわれわれの「下にあるもの」への畏敬に裏づけられていなければならぬ。虚籠が慈悲を表す曼荼羅謹作によつて現代に訴えたかったのも、この「下にあるものへの畏敬」を基点とした全人類、全生物に拡大してゆく共生の倫理の建設であり、それ以外には人類の未來がないことを直覺していたからであろう。

虚籟と秋野の生涯と仕事は、改めて現代のわれわれに、人は何のために生きるか、日本人の真情とは何か、われわれに何ができるかを考えさせずにはいられない。彼等が成し遂げた仕事の量と質、動機、そのために払った努力と犠牲は、便利さと豊かさに慣れ、しかし利殖と多忙にからめて深く考えることのできなくなつた今日の日本人からみると、文字通り桁外れにみえる。しかし彼等はそれを実際に、しかも考え得る限り最悪の状況の中で成し遂げたのであり、日本人にも日本人独自の世界平和の思想があることを、たつた二人で実行したのである。そうすることでも、それがいかに困難であつてもわれわれに決して不可能ではないことを示したのである。

4 順靈の綴錦織その後

昭和六二（一九八七）年の秋、鶴岡市郊外柳引町の天沢寺に、虚籟をしのんで「糸塚」が建てられた。虚籟がこの寺に滞在したのは一年余であつたが、その時、虚籟は一つのねがいを書き残していた。それは、虚籟が曼荼羅謹作に当つて、「仏像になつた絹糸はそれが仏像になるが故に香を薰き、燈明を灯し、更に花などを供えて衆人礼拝の対象となるが、同一の絹糸でありながらその謹作時において端糸屑糸となつたが故に省みられることなく或いは空しく捨て去られる運命にある」糸屑を悼んで、彼がその曼荼羅奉行中最も険難な時を過した天沢寺に、将来この糸屑を供養する塔を建て、日本人の至情を後世に伝えると共に、ここを恒久的な世界平和祈願の発祥地にしたいというものであつた。この糸塚は、そのねがいを忘れずにいた村人達が、彼の没後二五年を記念して建て

たものである。

そしてこの糸塚の建立を契機に、虚籟を敬愛する有志の人々が集つて、平成四（一九九二）年に虚籟図録刊行会ができ、致道博物館と安房博物館、一燈園の後援によつて散逸した虚籟の作品の追跡が行われ、平成六（一九九四）年に初めて彼の作品の図録が出版された。（『順靈の綴錦織——世界和平の祈願に生きた遠藤虚籟・秋野の芸術と思想』燈影舎）また、平成八（一九九六）年には、鶴岡市と致道博物館の努力によつて、国連本部にあつた『中尊阿弥陀如来』の里帰りが実現し、同年八月、虚籟と秋野の夢であつた曼荼羅中央部『脇侍觀世音菩薩』『勢至菩薩』と『不動明王』を合せた回顧展が鶴岡市で開かれ、「世界平和と日本人のこころ」をテーマに講演とシンポジウムが行われた。（『遠藤虚籟と世界平和』鶴岡市役所）虚籟没後三三年目のことであつたが、期間中、会場を訪れた県内外の見学者は延七千人におぼつたといふ。

この催しの間、虚籟に劣らず一般会衆の、わけても女性達の関心が高かつたのが、秋野であつた。それは会場に展示された彼女の処女作『花籠』や『洋蘭のある綴錦壁掛』に対する感嘆と共に、彼女の優れた芸術的才能を彼女自身のために發揮させてやりたかったという思いが、人々の間に一入強かつたからであろう。実際、自己実現が当然の目標となつた今日からみると、秋野の生涯は虚籟以上に無私的で反時代的であつた。しかし、真に人間の尊厳に値する偉大なもの、美しいものは、それを創つた者だけでなく、いつもそれを理解し、陰で支えた者がある。それゆえにこそ、われわれはいつも価値あるものの創造に当つて、自ら陰になつて献身することを選んだ者に対する尊敬と感謝、この過程で犠牲になつたもの総ての苦しみと悲しみを忘れてはならないのであり、それが虚

籟の平和思想の原点、糸塚建立の精神でもあつたが、この虚籟のこころは、この間の一連の行事の企画と実行がすべて中央の政財界や美術界の力を借りずに、彼の故郷鶴岡の人々の自発的な参加と広範な支援を得て行われたことで、深く確かに受けとめられたようみえる。

その後の秋野は、不幸にして健康に恵まれず、旧知の館山病院で入退院を繰りかえす生活を余儀なくされてきたが、綴織に対する研究と創作の意欲は衰えることがなかつた。ただ、作品は生活のためにすぐ手放されて、彼女はいつも清貧だつた。そしてこの展覧会を機に、有志の人々によつて今度こそ秋野に楽しんで自分の作品を織つて貰おうと募金が行われたが、秋野はその金で糸塚の傍に虚籟の墓碑を造つた。その碑面には、虚籟が曼荼羅謹作の開始に当つてその決意を詠つた

曼荼羅を織らん年なるわが心

雨にめげず風にさわがず

が刻まれている。